

『新平家物語』

吉川英治著／講談社

小・中・高校と、なぜ歴史の勉強をするのかといえば、受験で良い点を取るためだというのが、この国の現状である。

日本の歴史の受験勉強は、めまいがするくらいの膨大な歴史事象の暗記とイコールである。それは、記憶力と忍耐力を試しているだけで、人間力の成長という観点では、労多くして功少なしといったところではないだろうか。

私が思うに、人間が歴史を学ぶことの意義のひとつは、アイデンティティの確立と愛国心の教育である。自分たちは何者であるのか、どうしてこの地でこういう志向を持って生きているのか、を理解し、未来に向けて何を目標としてどう生きるのかということを決めるためには、自分が生まれ育ったところの歴史をまず理解する必要がある。他方で、すべての国民に自国の歴史を勉強させることで、愛国心を養わせることは、国家戦略上、必要な行為だと思われる。国民が愛国心を持っていることは、国家成立の前提条件ともいえる命題であるからである。

しかし、今の日本の歴史教育では、アイデンティティと愛国心のどちらも養える状況ではなく、完全に失敗していると私は思う。

かたやヨーロッパ諸国では、自国の歴史の授業と言えば、かつては大航海時代以降のわずか数百年だけを勉強するものであり、最近では、第二次世界大戦以降の歴史だけを勉強する国もある。現在から徐々に過去にさかのぼりながら歴史を学ぶという授業スタイルが採用されているところもある。そうすることで、若い人々にアイデンティティと愛国心を植え付けるのである。日本の歴史教育は、戦略上の観点から、他の国と比較して、非常に遅れているのである。あるとき私は一念発起して、日本の歴史を勉強しなそうと決意した。歴史事象の記憶ではなく、その背景にある精神論的なものを学ぼうと思った。日本人固有の武士道的なもの考え方のルーツを知りたいと思い、何がよいか調べているうちに、最初に武士の世を造った、平清盛という人に興味が湧いた。そこで、吉川英治の新平家物語をなんとなく読み始めた。新平家物語は、文庫本で16巻、約6000頁という大作である。平清盛の出生から、平家滅亡までを描いた長編作品である。難しい状況に追い込まれたときの、清盛の苦悩やバランスの取り方は、複雑化した社会の中で答えを見いだしにくい我々にとって、参考になるところが多い。今の時代、勧善

懲悪的なものよりも、人間の二面性を赤裸々に綴った本作のようなもののほうが、得るものが大きいと思う。特に組織のリーダーには、清盛的な資質が求められるのだが、最近は若い人に限らず、その辺のことが理解されていないようにも感じる。特に日本のリーダーたるべき、政治家の方々に、清盛的な資質が欠落している人が多い。

なお、私は東日本大震災以降、あまり本を読む余裕がなくなって、「屋島の戦い」のところで長期休憩している。なんとか今年中には読破したいと思っている。

執筆者紹介

田中 泰司

環境・建設系助教。専門領域は、コンクリート工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『新・平家物語 全16巻』吉川英治著 講談社（吉川英治歴史時代文庫） 1989
年 各777円

[ブックガイド目次へ](#)